

言語学の発展が対象者の支援に

平素より、言語聴覚士に対する多大なご支援、ご尽力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、コロナ感染症による混乱から3年が経とうとしています。マスクが邪魔をし、話し相手の表情が読み取りにくい、笑顔を見ることができないといったもどかしさを今なお感じます。

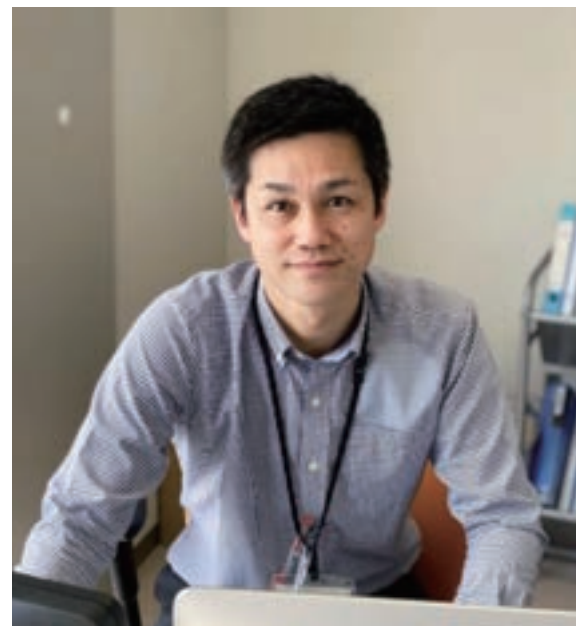
言語聴覚士の臨床では、感染症対策を十分に行なった上でリハビリも通常化し、一部ではオンラインリハも行われています。福岡県言語聴覚士会も、言語聴覚の日のイベントである無料相談会をオンラインで実施し、研修におけるグループワークもWeb上で行っています。また、一部の研修会をオンデマンド配信するなど新たな学習方法を提供できました。コロナ禍で何もできなかった訳ではありません。コロナ禍を経験したからこそ得たものが多くあります。制限だらけのあの頃と比べたら、今は多くの選択肢と可能性があると思える時代は必ずやってきます。そう強く思えるために、このウイズコロナ時代を創意工夫で乗り越えていきます。

言語聴覚療法においても同様のことが言えます。対象者の障害や苦悩に対して最善を尽くすべく、学問を基礎に創意工夫を凝らしたアプローチを行なうことが重要です。例えば、言語学分野で用いられる談話分析の方法は、失語症者の発話分析に用いられ、言語運用上の障害メカニズムを明らかにする手がかりとなっています。毎年、貴センターに開催していただくセミナーが、言語聴覚療法の展開について考えるきっかけとなっており、言語学の発展が対象者の支援につながっていることを強く感じます。関連学問の研究成果にアンテナを張り、現状に甘んじることなく、常に新たな可能性を模索する姿勢を持ち続けたいと思います。

最後になりましたが、貴センターがさらに一段の飛躍を遂げられんことをお祈りしております。

一般社団法人 福岡県言語聴覚士会
会長

大内田 博文



人文科学研究院附属 言語運用総合研究センター

スタッフの紹介

増田 正彦 (専門研究員)

専門分野は音韻論・音声学で、特に中国語を対象として、声調やそれに関連する現象などを研究しています。中国語の声調は、音の高さに関わるという点で日本語のアクセントと似ていますが、各音節に平調や上昇調、下降調などということが指定されているという点異なります。言語聴覚士や日本語教師の養成課程で音声学や言語学などの授業を受け持つこともしています。

山本 将司 (テクニカルスタッフ)

現在、人文科学研究院にテクニカルスタッフとして所属しています。専門は統語論、特に疑問詞疑問文に注目して通言語的性質を研究しています。疑問詞疑問文とはいわゆる「5W1H」を用いた疑問文のことです。そして、言語を用いたコミュニケーションの中で大きな役割を果たす文形式でもあります。ところが疑問詞疑問文は意外と言語間差異が大きく、そのような違いを英語、ドイツ語、イタリア語などで対照する研究を行っています。

2022年度のセミナー(予定)

※詳細は言総研のホームページをご覧ください。

国語セミナー

開催日 2023年2月24日(金) 14:30~16:30

講演1

講師 藤井 倫明先生(九州大学)

テーマ 「意味」か「意図」か——
中国思想に流れる2つの言語観

講演2

講師 静永 健先生(九州大学)

テーマ 「剽窃」か「オマージュ」か——
「唐詩選国字解」の諸問題

日本語教師セミナー

開催日 2023年3月4日(土) 14:00~16:00

講師 伊藤 秀明先生(筑波大学)

テーマ 日本語学習環境とレジリエンス

言語聴覚士セミナー

開催日 2023年3月11日(土) 10:00~12:00

講師 河野 俊寛先生(北陸大学)

テーマ 小児の書字障害の理解・評価・支援

Center for the Study of Language Performance

発行日 令和4年 12月 24日 発行者 静永 健

編集発行 九州大学大学院人文科学研究院附属 言語運用総合研究センター
〒819-0395 福岡市西区元岡744 [TEL・FAX] 092-802-5104 [URL] https://www.2lit.kyushu-u.ac.jp/~cslp/

印刷 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 [TEL] 092-531-7102 [FAX] 092-524-4411

言総研ってなに?

九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センターのことです。「ことば」に携わる方々と大学とをつなぐ架け橋になることを目指しており、現在、主に次の3種類の職業を意識して講演会やセミナーのテーマを設定しています。

- 言語聴覚士
- 中学・高校等の国語科の教員
- 日本語教師



大学の研究を教育・医療の現場へ

言総研通信

Vol.3

こころとコトバの声をきく

みなさん、こんにちは。言総研通信の第三号をお届けします。

中国のことわざに「锣鼓听声、听话听音／鑼鼓聽聲、聽話聽音」というのがあります。ドラや太鼓の音楽と言えば、中国ではもっとも脳天気で賑やかな演奏のはずですが、喜怒哀楽、演奏者の気持ちちがひでも落ち込んでいると、瞬時にその響きに表れるのだそうです。人の話も同じこと、毎朝「こんにちは」と挨拶を交わすだけなのに、ふっと、その人の今の気分が透けて見える時があります。そんな日は、ちょっと振り返って声をかけてあげたいものです。「○○さん、今日はどうしたの?」

先のことわざを私なりに意識してみると、「祭り囃子は声を聞き、人の話は音を聞け」とでもなるのでしょうか。もともとは「鑼鼓には「音」を聴き、聴話には「声」を聴く」であるべきところ、逆さまに言ったおかげで生まれた格言です。

コロナの規制がかなり緩和され、今年は大学の授業もほぼ通常(一部は対面とオンラインの所謂「ハイブリッド授業」)に戻ってまいりました。でも、授業以外の部分(休み時間の和やかな会話や、入学や卒業にからめてのコンパなど)はまだまだで、学生との距離にちょびり寂しさを感じているのは、きっと私だけではないと思います。

言葉には、それが発せられる際、その人の感情が伴います。それは音声としての「口ぶり」はもちろんのこと、身体の「身ぶり」「手ぶり」、そしてさらには文字として書かれたものにも、また異なったかたちで宿っているものです。日ごろ杜甫や李白など千数百年を離れた文章を読んでいる私ですが、その「書きぶり」に思わず手を拍ち、また涙がにじみ出ることもあります。この感動を分かちあいたくて、さあ、授業に出ようとするのですが、翌朝の暗いニュースにこころ乱されて、その感動がうまく再現できないときがあります。まして、リモート参加の学生さんにはこの私の不安な気持ちが伝わっているのだろうか?と、さらにごわごわとした気持ちになってしまいます。

一日もはやいコロナの終息を祈ってやみません。

あとさきの順序が逆になってしまいましたが、今回も人文科学研究院の特定プロジェクト教員からアントニー・クレイブン先生(英語学・英文学講座)と孫琳浄先生(中国文学講座)、そして一般社団法人福岡県言語聴覚士会の大内田博文会長にご寄稿いただきました。ありがとうございます。今後ともどうぞ言総研をよろしくご活用ください。

2022.12.13

九州大学大学院人文科学研究院 中国文学講座教授
附属言語運用総合研究センター長

静永 健



『水滸伝』とともに

四月に九州大学人文科学研究院に着任してはや八ヶ月が経ちました。今はただただ時間の経過の早さに驚くばかりです。

日本に来て今年で十七年目ですが、実は九州は初めてです。ただ電車の窓から流れる風景は無性に懐かしく思います。というのは、故郷は中国山東省威海市というところで、三面海に囲まれており、子供の時に夏休みになる度に毎日海へ遊びに行きました。コロナで帰れない中、故郷の海岸と似ている風景を目にする之余計に親近感が湧きます。

専門は中国白話小説と和漢比較文学です。主に曲亭馬琴の読本作品における中国長篇白話小説『水滸伝』の受容について研究しています。そのせいでしょいか、よく「一番好きな豪傑は誰ですか」と質問されます。さあ、誰でしょう。この機会に少し考えてみたいと思います。

ご存じの通り、『水滸伝』は百八人の豪傑が痛快にあばれまわったあと梁山泊に集結し、さらに朝廷の招安を受け国家軍として戦ったすえに、散り散りになる物語であります。豪傑たちが痛快にあばれまわるといっても、百八人全てが個人の活躍場面を持っているわけではなく、メインとして描かれたのはわずか十数人しかありません。百姓仕事に全く興味がなく、もっぱら武芸を好む美青年史進、酒に酔うと大暴れする剛力無双の正義漢魯智深、武芸に長けて愛妻家の林冲(時には粗暴な一面も見せる)、楊家将一門の子孫楊志、腕が立たないが、孝行を重んじお人好しの宋江、緻密で冷静な性格を持ちながら、荒々しい残忍な一面もある兄思いの武松、頭が良くないが、根は優しく母思いの乱暴者李逵、せっかちで直情的な楊雄、勲が鋭くて思慮深い愚直な石秀、軍師具用に騙され梁山泊に落草した金持ち盧俊義、頭の回転が早く多芸多才な遊び人燕青などなど。

『水滸伝』は北宋末期という不正と汚職が横行する乱世を舞台とし、物語全体の三分の二くらいは豪傑たちの個人的活躍で彩られています。列挙していくと改めて彼らの数奇な運命に驚かされます。まるで人々の不幸を一身に請け負っているように、幾たびもの不運や悪質な妨害や奸計に遭い社会の底辺でもがき、義憤、怒り、恨みの挙げ句に梁山泊にのぼることになります。ゆえに、『水滸伝』豪傑の大半は道德と倫理をかえりみず、豪飲・強奪・窃盗・殺人も日常茶飯事、まさしく身を以て善と悪は表裏一体であることを物語っています。もちろん李逵のような最初から富や名声には目もくれ



九州大学大学院人文科学研究院
中国文学講座 講師

孫 琳浄

Sun Linjing

ず、破壊のみを楽しむ異端児もいますが、彼こそ梁山泊集団の性格を代表する人物であるとも言われています。なぜならば、彼が「真」(本来の純粋な真である心)に辿り着いた者だからです。

百八人の豪傑たちの全ての活躍が終わり、最後みやこに帰還したのはただ二十数人しかおりません。その上に、総大将宋江と副将盧俊義は権臣に毒殺され、宋江はまた道連れに李逵を毒殺し、呉用と花榮は宋江に殉死しました。所詮盗賊に過ぎない彼らは国家を転覆させるといった最終目標を持たない限り、いずれは国家権力によって排除されてしまうのは目に見えています。従ってこのような終焉を迎えるのも無理はありません。そのあまりにも虚ろで哀れな運命をもって、「一番の人気もの」「一番残念な豪傑」を選出することはできませんが、「一番好きな豪傑」を選ぶことは難しいです。

一方、『水滸伝』が中国四大奇書の筆頭に数えられることになったのは、内容の痛快さ、すばらしさゆえのみならず、白話文という新たな文体、さらに白話小説というジャンルが『水滸伝』によって確立されたことにも由来するでしょう。白話とは中国の口頭語彙を使用する書記言語のことです。現代の日本語にも『水滸伝』の白話語彙に由来する漢語が認められ、多くは曲亭馬琴などの読本作家を通して導入され、そのまま定着したものであると考えられます。

また、『水滸伝』が江戸初期に日本に伝来して今日に至るまで、五十種類以上の翻訳書が刊行されましたが、中でも曲亭馬琴・高井蘭山著、葛飾北斎画『新編水滸画伝』はもっとも日本人に読まれていた存在であると言えます(実際馬琴が関わったのは最初の十回のみではありますが、クオリティーの高さは注目に値します)。そして、馬琴が『新編水滸画伝』を執筆する際に利用した和刻本『忠義水滸伝』第二集の旧蔵者は、まさしく山口県出身の藩医栗山孝庵(献臣)という人物であります。孝庵は日本で最初の女性解剖を行ったことで知られ、彼の旧宅や解剖を行った遺跡は現在もなお目にするすることができます。和刻本第二集は彼が女性解剖を行った年に刊行されたもので、彼がいっつ該本を入手したのかは定かではありませんが、名医として評判の孝庵ならたやすく入手できたでしょう。そして彼の死後該本は売却され、浪華の古本屋の手に入り馬琴のもとへと至ったと思われます。

このたびは折角九州に来ましたので、周辺各地を巡り、自然を堪能しつつ歴史探訪をしてみたいと思います。(日本語も孫先生)



学生の英作文を どう評価するか

学生の英作文の評価や分析を専門にする者として、私は常々、他の先生がどのようにして学生の英作文を評価しているのだろうかと考えています。作文の評価はそこで述べられている内容や政治的理念に基づいて評価者がその作文を好むか否か、というような主観的な意見によるものでしょうか。もしくは、何らかの客観的な基準に基づいたものなのでしょうか。願わくは、その答えは後者であってほしいものです。

偏見のない評価を下すために、先生たちは「複雑さ(Complexity)」、「正確さ(Accuracy)」、そして「流暢さ(Fluidity)」という三つの観点から、学生の作文を見ているでしょう(この三つの観点をまとめて、ここでは「CAF」と呼ぶことにしましょう)。しかし、このような客観性を持った言語資料に基づくアプローチには問題があります。その問題とは、どのようにして「複雑さ、正確さ、流暢さ」を測るのかということ、さらには、その作業には大変な困難と莫大な労力が要求されるということです。

「流暢さ」は、CAFの三つの評価基準の中でも最も測定しやすい項目です。ただ単に作文の執筆作業に時間制限を設ければ、先生は学生が1時間でどれだけの量の文章を書くことが出来るのかを量ることができます。ところが、学生がより多くの字数を書けるようになれば「流暢さ」は向上しているということになる一方、「流暢さ」の向上は「複雑さ」と「正確さ」を損なう原因にもなります。つまり、トレードオフのようなことが「F」と「CA」の間で起きてしまうのです。特に与えられた課題が学生のキャパシティを超えて非常に多くのことを要求しているような過酷なものである場合、学習者はCAFの三つの領域全てに注意を向けることが出来なくなると言われています。

Skehan(2009)のトレードオフ仮説は、CAFの持つ三つの側面の内、一つの側面におけるパフォーマンスの向上が他の側面のパフォーマンスを抑止してしまう、というような相互依存関係であると述べています。これは、例えば「正確さ」という部門における高いパフォーマンスは、「流暢さ」という別の部門におけるパフォーマンスの低下をもたらすことを意味しています。つまりCAFにおける三つの部門「流暢さ、複雑さ、正確さ」の間には競争関係が存在しているのです。さらにSkehan(2009)は、大人の学習者は形式よりも内容を優先する傾向にあり、このことがさらなる言語発達を妨げてしまう、と指摘しています(つまり、内容や意図を伝えるために「複雑さ」が向上する一方で、形式、つまりは「正確さ」が後回しにされて低下する傾向にあります)。従って、「正確さ」と「複雑さ」の間にもトレードオフ関係があるようです。

一般的に「正確さ」はCAFの中で最も明快な要素であると言われており、その評価の際には言語使用の規範にどれだけ従っているかということが参考にされます。多くの場合、先生は正確な語彙・文法が使用されているかを見ます。従って、コンピューターで簡単に測定することができる「流暢

さ」とは異なり、「正確さ」は手作業で測定される必要があるため、その測定はより困難で、より多くの時間を必要とします。英作文の「正確さ」の測定をする比較的簡単な方法は、エラーのないTユニット(「Tユニット」とは多くの場合、文(センテンス, sentence)を指します)の数、もしくは、Tユニットごとのエラーの数を数えるというものです。

適切な英語教育を受けた人々の多くには文法を活用することが重要であるという合意があるため、「正確さ」が議論の問題になることはほとんどありません。しかしながら、CAFの三つの評価基準の中でも「複雑さ」は最も議論が分かれると言われており、その定義方法も様々です。SLA(第二言語習得)の研究者が「複雑さ」に関して最も注目する点は、統語的、もしくは文法的な複雑性です(Ellis&Barkhuizen, 2005)。このように「複雑さ」を理解すると、ソフトウェアプログラムを用いて「複雑さ」を測定することが可能です。そのため、複雑性という面で時間と共に学生のライティングが向上しているかについては容易に評価することが出来ます。

理論的にはこのような三つのライティング能力の評価基準CAFが機能するべきなのですが、実際には先生が学生のライティングを評価する際にCAF基準が全て使用されることはめったにないようです。それにはいくつかの理由があります。例えば、学生には評価基準が容易に理解することが出来ないこと、測定方法が議論の分かれるものであること、測定のために多くの時間を要することなどがあげられます。また、ある学生がCAF基準の三点全てにおいてライティング技能が向上している場合であっても、その作文内容がテーマから外れたものだったり、修辭様式や言語使用域について誤りがある、もしくは内容が薄い、等々と言ったことが起こります。残念ながら、このような問題によって、CAF基準はいまだに教師やライティングの評価者に実行されることはなく、研究者の手にあり続けています。その結果、作文の評価には、CAF基準ではなく慣例に従った「多少客観的」な方法が今だに最も広く使用されているのです。(訳:久保田 舞)

孫先生とクレイブンの原文の原稿は、
言総研のホームページからご覧いただけます。

